小田原北条氏
百年の夢

枯るる樹にまた花の木を植ゑそへて
もとの都になしてこそみめ
伊勢宗瑞（北条早雲）

一般社団法人 小田原市観光協会

小田原北条氏百年の夢

京の都で起こった応仁の乱により、飢饉や一揆は頻発、室町幕府の権威は下がり、世情が不穏になる中、理想の国の建設を夢見た青年武将がいました。彼、伊勢宗瑞（北条早雲）が手がけた理想の国づくりは五代に渡って引き継がれ、百年後には小田原を中心に関東一円を治めるまでになったのです。

税制・福祉・インフラ整備など、小田原北条氏が営々と築いた治世の施策を、後に多くの大名が真似たとも言われています。小田原北条氏が夢見た理想の国づくり。その治世施策をご紹介したいと思います。

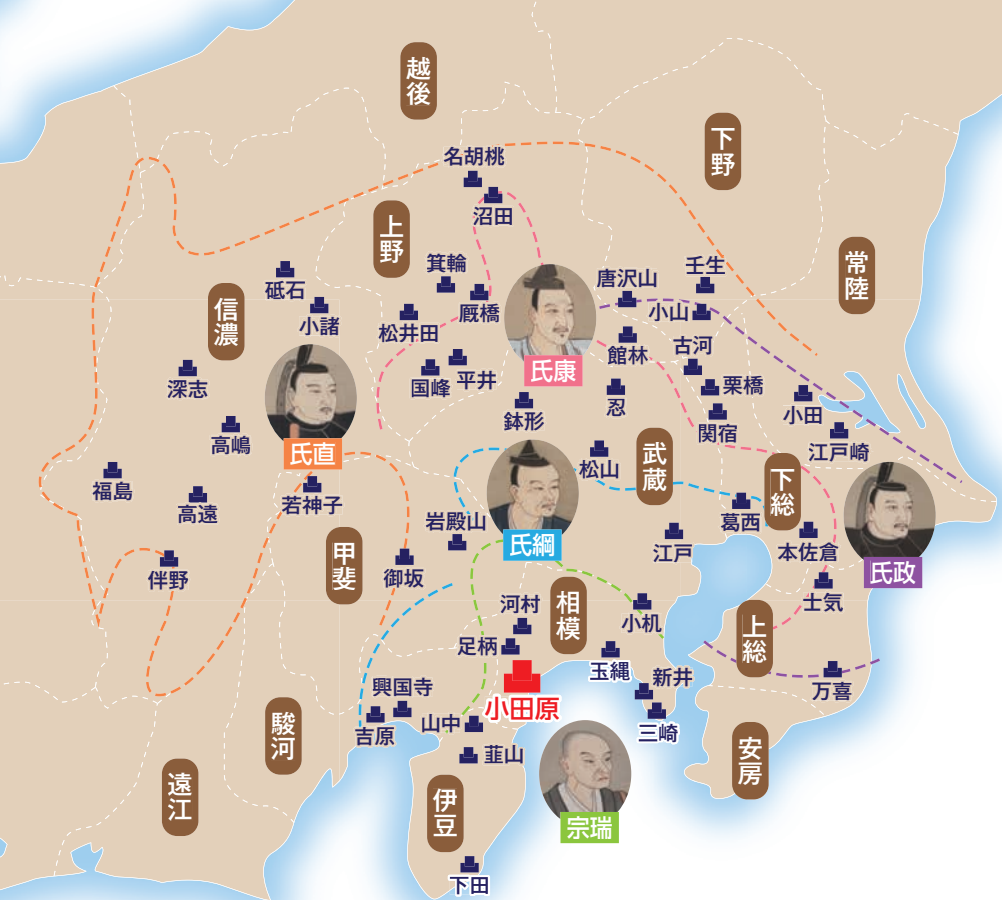
小田原城天守閣 館長 諏訪間順（右）
小田原城天守閣 学芸員 岡潔（左）

下京ほどあるべく候

天正18（1590）年、小田原合戦で小田原城を包囲した豊臣軍がこんな一文を残しています。

此内家かずしらず候
此内下京ほどあるべく候
小田原城下には数えきれないほ

どの家屋敷があり、京都の下京（現在の京都市街地の南半分）ほどもあるとの記述も、敵方の文書だけに信憑性があります。確かに小田原北条氏（以下北条氏）が関東を治めた五代約百年の間、身内の家督争いもなく、民衆の一揆も起こりませんでした。百年といえば昭和と平成を合わせたより長い期間です。しかも世は戦国時代。諸国の大名が生き残りをかけてしのぎを削った時代にこの繁栄ぶり。現代ならば「北条マジック」とでも呼ばれそうな統治実績ではないでしょうか。いったい北条氏は戦国の世に京の都のような国をどのように作り上げたのか――。



初代 宗瑞　四代 氏政
二代 氏綱　五代 氏直
三代 氏康

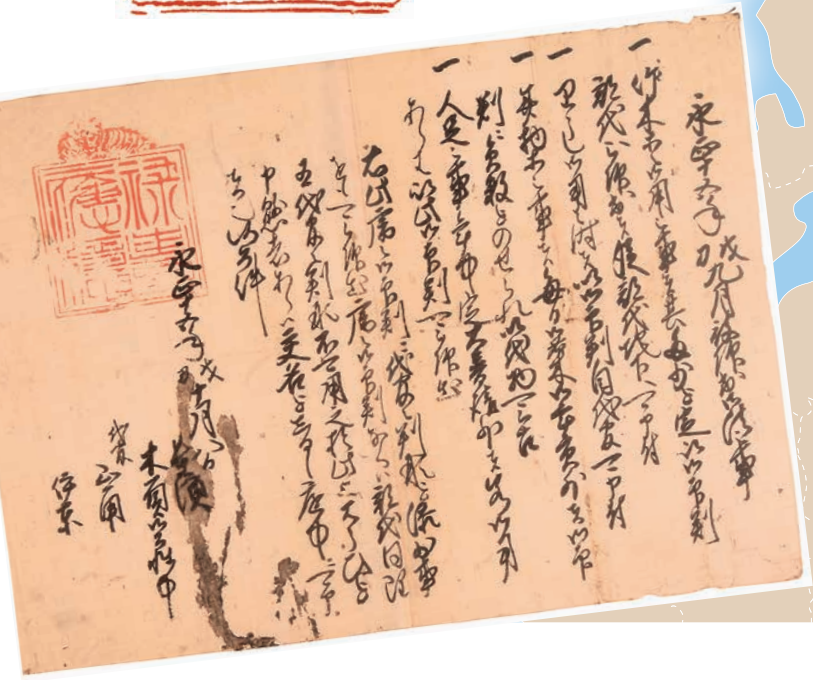
※各時期の最大領土を示していますが、確定が困難な地域、想定した地域や後に他の大名家に支配が移った地域などを含みます。

武にして禅 伊勢宗瑞

そもそも北条氏の初代伊勢宗瑞（北条早雲）は、〝出自も不明な素浪人から成り上がった戦国の梟雄〟とのイメージがまだ根強く残っています。しかし最新の研究では出自不明どころか、備中（岡山県）伊勢氏の出身で、室町幕府政所執事の近親であり、将軍の秘書官的役職の申次衆としての職務経験もある人物だったということが判明しています。しかも禅寺にて修行も積み、人は、国はいかにあるべきかを考えていたようです。

京の大徳寺（臨済宗大徳寺派大本山）の第七十二世住持東溪宗牧が宗瑞を評して「武にして禅にゆく人」と残しています。

この印判が最初に押された文書（下）には「虎朱印がなければ郡代・代官の文書があっても応じる必要はなく、もし強行するものがあれば直訴すべし」と明記されています。

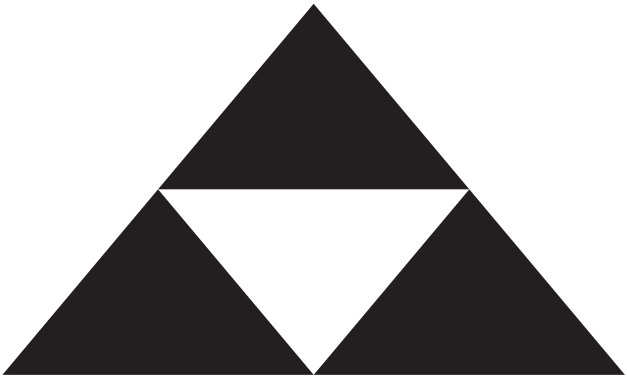


現在この文書の原本は行方不明となっており、左の写真は、残る写真と写しを合成して作成したものです。

民の禄壽、應に穏やかなるべし

五代に渡る北条氏の版図は、最大で下野（栃木県）から信濃（長野県）にまで達しました。広大な領国を公平に統治するため、北条氏は領民に直接公式文書で令を出していました。この時代、大名自らが領民に直接文書で令を出す慣習はありませんでした。北条氏は旧弊を廃し、新しい統治の形を示したのです。

その公式文書に押印されていたのが「禄寿応穏」の印判、上部に虎が描かれた別名「虎朱印」です。民の「禄寿（財産と命）、応に穏やかなるべし」。この「禄寿応穏」という言葉は北条五代の治世哲学の根幹を成す言葉になったと言えるでしょう。



北条五代

戦国時代、小田原城を本拠に関東一円を支配した戦国大名が北条氏です。歴代当主五人は、北条五代と呼ばれています。

16世紀初め、関東で理想の国家を作ろうと、大森氏に代わり、伊勢宗瑞(北条早雲)が伊豆韮山から小田原城に入りました。以後、北条氏は小田原を拠点として、多くの人材を上方から招き、産業を興し、着々と勢力を伸ばしていきました。二代目氏綱が関東支配の礎を築き、三代目氏康の時代には城下町の形態も整えられ、小田原は関東における政治、経済、産業、文化の中心として繁栄しました。そして、天下統一の機運が高まる中、四代氏政・五代氏直は、豊臣秀吉軍の攻撃に備えて町全体を取り囲む巨大な総構を築きます——。

初代

伊勢宗瑞（北条早雲）

1456 ～ 1519

左）北条早雲像　箱根町早雲寺蔵　右）伊勢宗瑞花押
中）早雲寺殿廿一箇条（『北条五代記』万治版）小田原城天守閣蔵

小田原北条氏五代の祖。室町幕府政所執事伊勢氏の近親で、備中荏原荘（岡山県井原市）を本貫とした伊勢盛定の子。

仮名を新九郎、実名を盛時、出家して早雲庵宗瑞と称しました。

生年は永享4年（1432）と伝わりますが、実際は康正年間（1455～57）頃とみられています。

伊勢氏の菩提寺法泉寺（井原市）に対し、文明3年（1471）に下した禁制が史料上の初見です。

同15年から将軍足利義尚に申次として仕えるなどし、長享元年（1487）に駿河（静岡県）に下向して甥の今川龍王丸（氏親）に駿河守護今川家の家督を継承させました。その後、将軍足利義稙の申次を務めた後、再び駿河に赴き、明応2年（1493）に堀越公方足利茶々丸を追って伊豆（静岡県）に侵攻。韮山（伊豆の国市）を居城とし、同7年に伊豆一国を平定して戦国大名の先駆けとなります。

次いで同5年から文亀元年（1501）までの間に小田原を支配下に置き、永正3年（1506）には戦国大名としては初めての検地を相模西郡（神奈川県西部）で実施しました。関東管領山内上杉氏や相模国守護扇谷上杉氏らと争って相模侵攻を進め、同13年には三浦氏を滅ぼして相模を征圧します。

同16年頃に家督を嫡子氏網に譲り、同年に没しました。

法名、早雲寺殿天岳宗瑞大禅定門。遺言により創建された早雲寺（箱根町）に葬られました。

北条氏の税制と福祉政策

広く公平な税制政策

大名を現代の地方自治体になぞらえるなら、まずは財政政策が問われるのではないでしょうか。

どの時代でも、強い大名は金山銀山の経営や、港による交易・貿易の収益など、いわゆるドル箱事業をもっていました。しかし伊勢宗瑞が治めた伊豆から小田原にかけては、当初大きな収益事業が見込めなかったようです。そこで宗瑞は税金を広く薄く公平に徴税する仕組みを整えます。室町時代の税制の中心は年貢です。他の領国では五公五民が一般的だった割合を、宗瑞は四公六民として納税者に優しい税制を敷きました。そして税制の公平性を裏付けるために、戦国大名で初めて検地も実施しました。

税制の比率だけでなく、公平性を保つために各種の施策も実施しています。たとえば米を量る枡を統一し不正を防いだり、年貢を直接北条家の蔵に収めさせ中間搾取をなくすなど。また業種によって徴税方法を変え不平等の解消にも努めました。地域による不平等対策も抜かりなく、領国の国境では

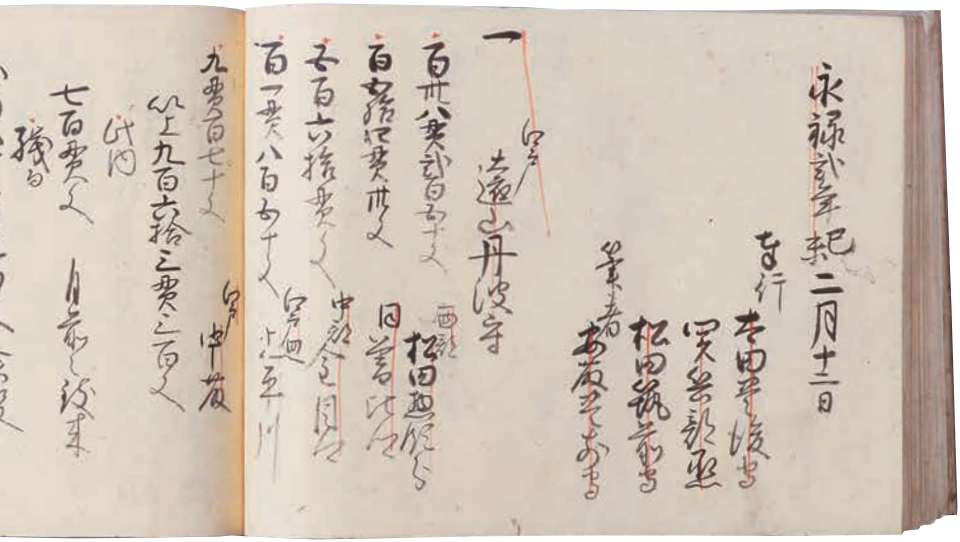
酒伝童子絵巻（下巻 部分）　アートにも造詣が深かった二代氏綱は、狩野派の二代目、狩野元信に絵を、前関白の近衛尚通らに詞書を依頼して、傑作『酒伝童子絵巻』をものしています。これは北条家の家宝になりました。（画像提供：サントリー美術館）

二代氏綱の末弟北条幻庵は小田原一の文化人と評され、芸能、芸術、職人技術などを庇護し、自らも制作したり演じたりしました。上の短刀は〝綱家〟作の名刀です。綱家は北条家のお抱え刀鍛冶で、二代氏綱が鎌倉の鶴岡八幡宮に奉納した大太刀も綱家の作品であり、現在も鶴岡八幡宮に所蔵されています。

年貢の二重取りがないように半額にもしたようです。さらに飢饉や災害時には納期の延期、減税、免税および低利な貸付制度まで整えていました。

さらなる税制改革も

税制改革では三代氏康も有名です。北条氏の領国には、前の時代からそのまま引き継がれてきた諸点役と呼ばれる種々の税がありましたが、氏康はこれを整理し、貫高（検地で算定した収納高）の6パーセントにあたる懸銭（畑にかかる税）と、貫高の8パーセントにあたる段銭（田にかかる税）に整理統合したのです。農民たちの税金は、年貢のほか、段銭・懸銭・棟別銭（家屋にかかる税）のいわゆる三税だけになりまし



た。

氏康は対農民だけでなく、家臣の所領管理も〝見える化〟するため「小田原衆所領役帳」を作成しました。所領役とは所領に応じて家臣に割り当てられる金銭、米穀、夫役（労働動員）のことで、この所領役算出の根拠になる台帳を整理したのです。

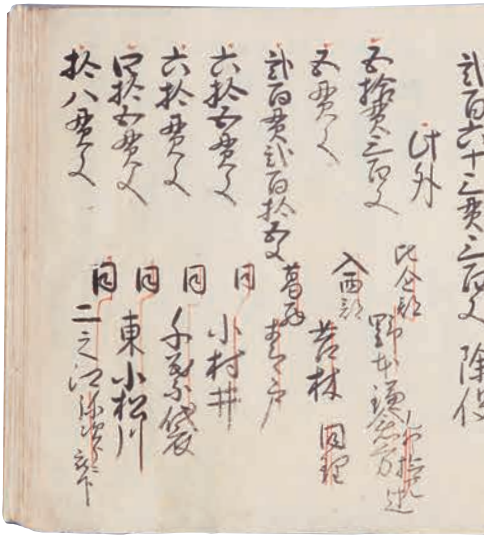
税の再配分と北条ブランド

また税の再配分、たとえば福祉政策はどうだったのでしょうか。

初代宗瑞は、製薬・医術の知識と技術で京都の足利将軍に仕えていた外郎家を招き領民の保健環境を向上させました。外郎家が作る透頂香という薬は、腹痛・頭痛・めまいなどの効用をうたい、京都でも薬効あらたかなりと朝廷や幕府の人々に重用されていました。この外郎家が現在も続く薬と和菓子の大老舗「株式会社ういろう」です。

また二代氏綱は、鎌倉幕府が消滅して以来荒廃していた鶴岡八幡宮や寒川神社、箱根権現の復興造営事業を進めました。当時の領民感情を考えると、神社仏閣が整備される安心感は小さくなかったと思われます。

なかでも二代氏綱の最大の功績はブランディングの成功でしょう。先代までの氏「伊勢」を捨て、関東最強のブランドネーム「北条」に変えてしまったのです。西国から来たよそ者大名とのイメージは瞬くうちに払拭されたようです。



小田原衆所領役帳　永禄年間に三代氏康が整えた台帳で、北条軍の構成などを知る上で、最も重要な資料のひとつ。写真は、江戸衆遠山丹波守の所領を記録した部分です。
（今井利貞氏所蔵、画像提供：平塚市博物館）

二代氏綱が箱根権現の社殿を造営した際の棟札です。棟札とは、建物の建築工事を行う際、その由来や経緯、施工年月日、関わった大工、願主などの名を記した木板で、この棟札の右上には「大檀那 伊勢平氏綱」と記されています。またこれが、二代氏綱として伊勢氏を名乗った最後の資料であり、以降は「北条」の氏になります。
（写真提供：箱根神社）

鎌倉の鶴岡八幡宮の復興造営事業は氏綱の没後も続けられた大事業でしたが、「東国社会の守護神」を復興したことで、鎌倉時代の執権「北条」という格式ある氏を名乗ることを当時の社会が認める決定打になったと見られます。

二代

伊勢（北条）氏綱

1487 ～ 1541

左）北条氏綱像　箱根町早雲寺蔵　右）北条氏綱花押
中）伊勢家虎朱印状（写）　永正15年（1518）10月8日
デジタル合成復元写真・小田原城天守閣蔵

小田原北条氏二代当主。

仮名・新九郎、実名・氏綱、官途名・左京大夫。

長享元年（1487）伊勢宗瑞の長男として生まれました。永正16年（1519）頃に家督を継承し、本拠地を小田原に移すとともに、「虎の印判」を用いる新たな領国支配体制を整えました。

宗瑞の没後、検地等の代替わり諸政策を実施した後、寒川神社（寒川町）・箱根権現（箱根町）など領国内の有力寺社の造営に着手します。

大永3年（1523）に伊勢氏から北条氏に改称し、相模支配の正当性を主張するとともに、山内・扇谷両上杉氏と敵対して武蔵（東京都・埼玉県）に侵攻しました。

翌4年に扇谷上杉朝興を破って江戸城（千代田区）を攻略し、ここを拠点に武蔵北部・下総（千葉県）方面への侵攻を進め、天文6年（1537）には扇谷上杉氏の本拠河越城（川越市）を奪って優位を決定的なものとしました。

次いで古河公方・足利晴氏の意を受け、同7年小弓公方・足利義明を討伐して（第一次国府台合戦）晴氏から関東管領職に補任され、領国を伊豆・相模二国から武蔵・駿河の半国と下総の一部にまで拡大し、北条家を関東随一の戦国大名に成長させました。

天文元年から東国の盟主としての地位を誇示すべく、鶴岡八幡宮造営の大事業に着手していましたが、ほぼ完成を見た同10年に55歳で没しました。

法名 春松院殿快翁宗活大居士。早雲寺に葬られました。

三代

北条氏康

1515 ～ 1571

左）北条氏康像　箱根町早雲寺蔵　右）北条氏康花押
中）北条氏康書状　永禄12年（1569）3月13日　小田原城天守閣蔵

小田原北条氏三代当主。

幼名・伊豆千代丸。仮名・新九郎。実名・氏康。官途名・左京大夫。受領名・相模守。

永正12年（1515）頃、北条氏綱の長男として生まれました。天文6年（1537）頃から後継者として政務に関与し、同10年に家督を継承しました。

同14年に扇谷山内両上杉氏と今川氏・武田氏が連携し、古河公方足利晴氏とも結び攻勢に転じます。氏康は駿河半国を放棄して今川武田両氏と和睦。

一方、和睦に応じない両上杉氏と古河公方を翌15年の河越合戦で撃破して扇谷上杉氏を滅ぼし、武蔵・上野（群馬県）の諸勢力を服属させて山内上杉氏を圧迫。同21年には山内上杉憲政を越後に退去させ、上野に勢力をのばしました。

天文23年武田今川両氏と相甲駿三国同盟を結び、古河公方足利義氏の権威を利用して関東東北部の諸勢力と優位な交渉を展開します。

内政では、分国の広範囲に及ぶ検地と税制改革の実施、伝馬制度の確立など支配制度の整備を進めます。家臣等に対する普請役賦課の基本台帳『所領役帳』の成立をみた永禄2年（1559）に家督を氏政に譲りましたが、小田原本城にあって「御本城様」と呼ばれ、「武榮」の印判を用いて氏政の政務を後見、また分掌・補完し、元亀2年（1571）に57歳で没しました。

法名大聖寺殿東陽宗岱大居士。牌所の大聖院は早雲寺山内、下総古河などの説があります。

北条氏のインフラ事業

箱根登山鉄道と交差する小田原用水。上板橋交差点付近。（撮影：小林輝久）

日本最古の市街地水道

北条氏のインフラ事業を見てみましょう。水争いという言葉があるように、昔から上水の確保は村や地域の死活問題でした。北条時代の小田原は評判が高く、多くの転入者を呼び込みました。市街地の上水需要も少なくなかったでしょう。現在も名残のある小田原用水は、日本最古の都市型水道と言われています。

建設年は定かではありませんが、連歌師・宗牧が著した『東国紀行』（天文14（1545）年）には「水上は箱根の水海（芦ノ湖）よりなど

小田原城の南東部、本町交差点の小田原宿なりわい交流館という施設の前では、街中を流れる小田原用水を再現しています。小田原宿なりわい交流館には、小田原の典型的な商家の造り「出桁（だしげた）造り」という建築方法が用いられており、2階正面は出格子窓で昔の旅籠の雰囲気を醸し出しています。（撮影：小林輝久）

小田原合戦で豊臣軍だった毛利家には多くの陣取図が残っています。その中の一つの左図には、早川から分岐した川が小田原の市街地に注いでいることが残されています（部分拡大、青い線は編集部による）。（写真提供・所蔵：山口県文書館）

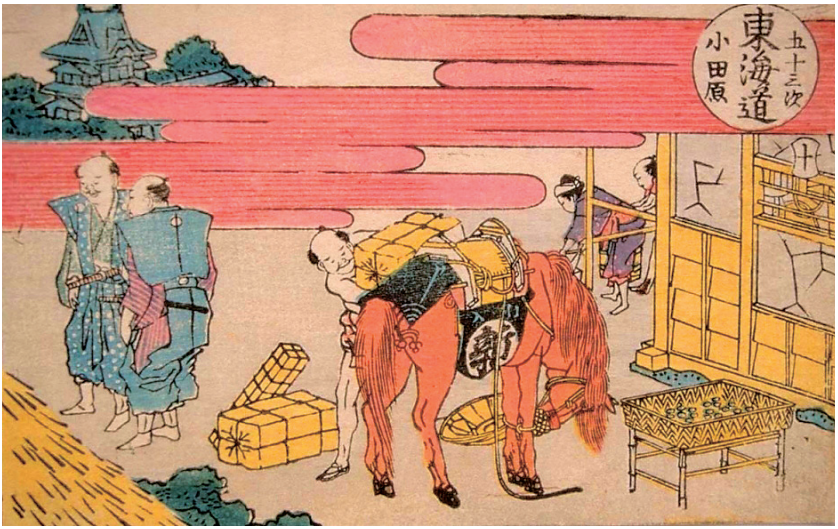
きゞ侍りて、驚ばかりなり」との記述があり、芦ノ湖・早川から用水を引いている様子が記されています。

小田原用水は昭和になってからも水車に活用されるなど、実に四百年以上にわたって小田原の町を潤してきました。現在はほとんど暗渠になっていますが、一部の開渠部では往時を偲ぶことができます。

物流インフラ 伝馬制度

二代氏綱は版図の拡大とともに、物流インフラの整備も進めました。主な街道の宿場や新しい宿場を活用し、伝馬制度（てんませいど）を整備したのです。

伝馬とは宿駅に馬や人足を備え、長距離の荷駄をリレー方式で



葛飾北斎　東海道五十三次小田原 小判横絵 文化七年
この浮世絵は江戸時代のものですが、荷を積み替える様子や荷や朱印状を確認する役人がいたことなどは北条時代も同様であったと思われます。(岩崎清江様所蔵、写真提供:小田原市)

運搬する物流システムで、後には伝馬用の朱印「馬の朱印」も登場するほど活用されました。北条氏の領国は、二代氏綱の時代には相模はもとより武蔵の河越（埼玉県川越市）まで広がっていました。現代でも「経済の循環器」に例えられる物流システムを、北条氏はいち早く整備していたと言えます。

町小路数万間、地一塵無し

街道と物流が整備され小田原には全国から職人や文化人が続々と集ったため、北条氏は小田原市中の清掃も奨励し、都会でありながら清潔な職住環境が整えられていました。京の南禅寺（臨済宗南禅寺派大本山）第二六一世住持東嶺智旺は明叔録の中で「町の小路数万間、地一塵無し」と書き残しています。

この記述に続き「東南は海なり。海水小田原の麓をめぐるなり。太守の墨（北条氏の館）、喬木森々、高館巨麗、三方に大池有り。池水湛々、浅深量るべからざるなり」と記されています。この描写は現代の発掘調査の結果と合致することから、当時の小田原府中は相当な規模で整然とした街並みが作られていたことが分かります。

北条氏の議会政治と法治制度

小田原城の銅門（あかがねもん）で展示されている評定の復元イメージ。銅門の内部は土・日・祝日に公開されています。（写真提供：小田原市）

小田原評定という議会政治

「小田原評定」といえば、いつまでも結論の出ない会議という意味が定着してしまっています。しかし、本来の「小田原評定」は、重臣たちを評定衆とした、合議による民主的な政治を表す言葉なのです。実際に北条氏が発給した公式文書には、評定衆の署名が入っています。重要な案件は当主の独断ではなく、月二回の定例の会議で評定衆に任命した複数の有力家臣による合議で決定されていたのです。鎌倉時代にもあった評定制度を参考にしたようですが、鎌倉時代の評定制度は将軍の独裁が強まるとともに形骸化しました。小田原北条はある意味最後まで合議の精神を忘れなかったとも言えます。

証拠重視の法治制度

評定制度は政治だけでなく、庶民にも民事裁判や民事調停として開かれていました。評定の進め方は現代の裁判制度と近いものがあります。まず原告の訴えで評定所から被告に書面が出されます。被告は反論に必要な書類を揃えて、評定所に戻します。それに対して原告の説明があって、というよう

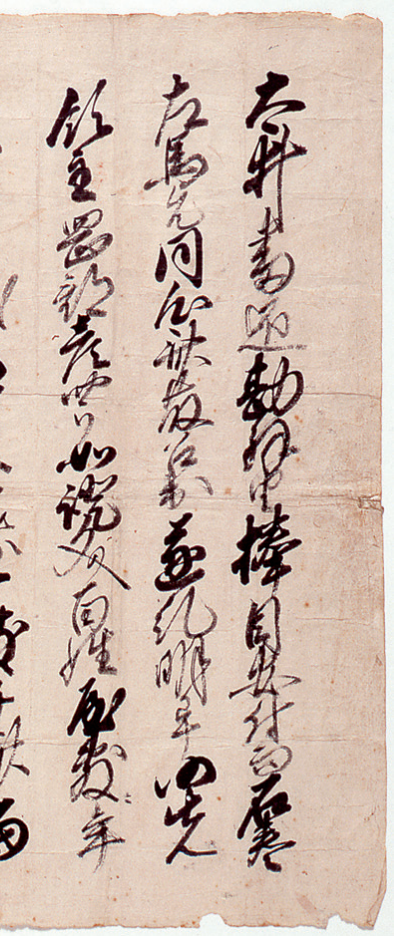
に3回までは書面でやり取りをします。これを二問二答といい、結論が出なければ法廷で対面式の裁判を行います。

判決は過去の記録を参考に、勝訴側に虎の印判が押された「裁許状」が出されるしくみです。

身分不問で誰でも訴訟可能

天正四年の日付がある裁許状が残っています。

原告は大井郷に住む番匠（ばんしょう）（職人）で、被告は大井郷の領主斎藤某（なにがし）。番匠は「以前の領主岡部彦四郎との間に屋敷地の税は不要との証文を交わしていたものの、新しい領主斎藤に徴収された。」以前の証文を証拠として提出し、「徴収は不当なものなので返還されるべき。また今後の地代の支払いも不要なはず。」と訴えていたようです。この訴えを担当した山角康定（やまかくやすさだ）という評定衆は、証文の有効性を認め、領主斎藤に徴収金の返還を命じています。さらに「まずは取り上げた馬を明日にでも返すこと」と念の入った一文まで見られます。



評定所という裁判所が、職人と領主のもめ事を公平に、そして証文を元に客観的に裁いていた様子が見て取れます。このように北条氏の領国では身分によらず訴訟ができたのです。

時代劇などでは戦国時代は武士が威張り、農民が虐げられていたような安易な描写がありますが、北条氏の治世は、私たちがイメージするよりもずっと民主的な社会だったようです。史書などをみると、江戸時代の方がかえって儒教を背景にした社会的序列が法に優先する、理不尽な様相が見られる気がします。

北条家裁許朱印状
大井の番匠（＝原告）と、その領主斎藤某（＝被告）の間に起こった訴訟に関する裁許状です。裁許状は、原則として勝訴者に通知されました。訴訟を担当したのは、評定衆の山角康定であり、その署名と花押が据えられています。
（写真提供：小田原市）

四代

北条氏政

1538～1590

左）北条氏政像　箱根町早雲寺蔵　右）条氏政花押
中）北条氏政書状　元亀4年（1573）7月23日　小田原城天守閣蔵

小田原北条氏四代当主。

幼名・松千代丸。仮名・新九郎。実名・氏政。官途名・左京大夫。受領名・相模守。

天文7年（1538）頃、北条氏康の次男に生まれ、兄が早世し嫡子となりました。永禄2年（1559）氏康から家督を譲られ、後見を受けます。

家督継承直後は飢饉や疫病で疲弊した領内に徳政を実施して救済に努め、同4年小田原に侵攻した長尾景虎（上杉謙信）を撃退。同7年里見氏を撃破（第二次国府台合戦）したほか、度々関東に侵攻（越山）する上杉氏を武田氏と連携して牽制し、北武蔵・上野の諸勢力を服属させて次第に優位に立ちました。

同11年武田氏の駿河侵攻で今川氏を支援し、徳川氏との講和や上杉氏との相越同盟で武田氏を牽制。同12年武田氏が北条領へ侵攻すると小田原城で防ぎ退けました。

元亀2年（1571）氏康が没すると相甲同盟を復活、再び上杉氏と敵対して関宿城（関宿町）を攻略するなど、下野・常陸・房総へ勢力を拡げます。天正7年（1579）上杉氏の家督争いの対応で武田氏と敵対、徳川氏と盟約して対抗し、さらに織田氏への従属を決断します。

翌年家督を氏直に譲り、截流斎と号しますが、「御隠居様」として氏直の政務を後見し、「有效」の印判を用いて主導的立場にあり、同18年の小田原合戦の責を負い自刃しました。

法名慈雲院殿勝巌宗傑大居士。小田原伝心庵に葬られました。

五代

北条氏直

1562 ～ 1591

左）北条氏直像　箱根町早雲寺蔵　右）北条氏直花押
中）北条氏直書状　天正14年（1586）７月13日　小田原城天守閣蔵

小田原北条氏五代当主。

幼名・国王丸。仮名・新九郎。実名・氏直。官途名・左京大夫。

永禄５年（１５６２）北条氏政の次男（兄が早世していたため嫡子）に生まれます。同12年に今川氏真の養子とされ、駿河国譲渡を約されてもいます。

天正８年（１５８０）武田氏に備え徳川氏と連携して伊豆に出陣、この頃氏政から家督を譲られたとみられます。翌９年には軍役改定や段銭増徴など代替り政策を実施しますが、その後も「御隠居様」と称された氏政の後見を受けました。

同10年織田氏の武田領侵攻に与しますが、直後に織田信長が没すると、その家臣滝川一益を破って東信濃（長野県）を制圧、さらに甲斐（山梨県）に進撃して徳川家康と対陣します。

甲斐・信濃の放棄に替え、上野の領有と家康の娘督姫との婚姻を条件に徳川氏と和睦すると、上野・下野への本格的な侵攻を開始し、足利義氏の没後断絶していた古河公方の権力と領国を併合して、関東における身分秩序の頂点に君臨するとともに、小田原北条氏最大の領国を形成しました。

徳川氏らと連携して豊臣秀吉に対抗した後、服属を表明しますが、交渉が決裂。天正18年小田原城に籠って決戦に臨み、秀吉の大軍の前に屈しました。高野山追放後に赦免されて大名に復し、見性斎と称して秀吉に仕えますが、間もなく病没します。

法名松厳院大円宗徹大居士。墓所は早雲寺にあります。

北条氏の日本一広い城

難攻不落の小田原城

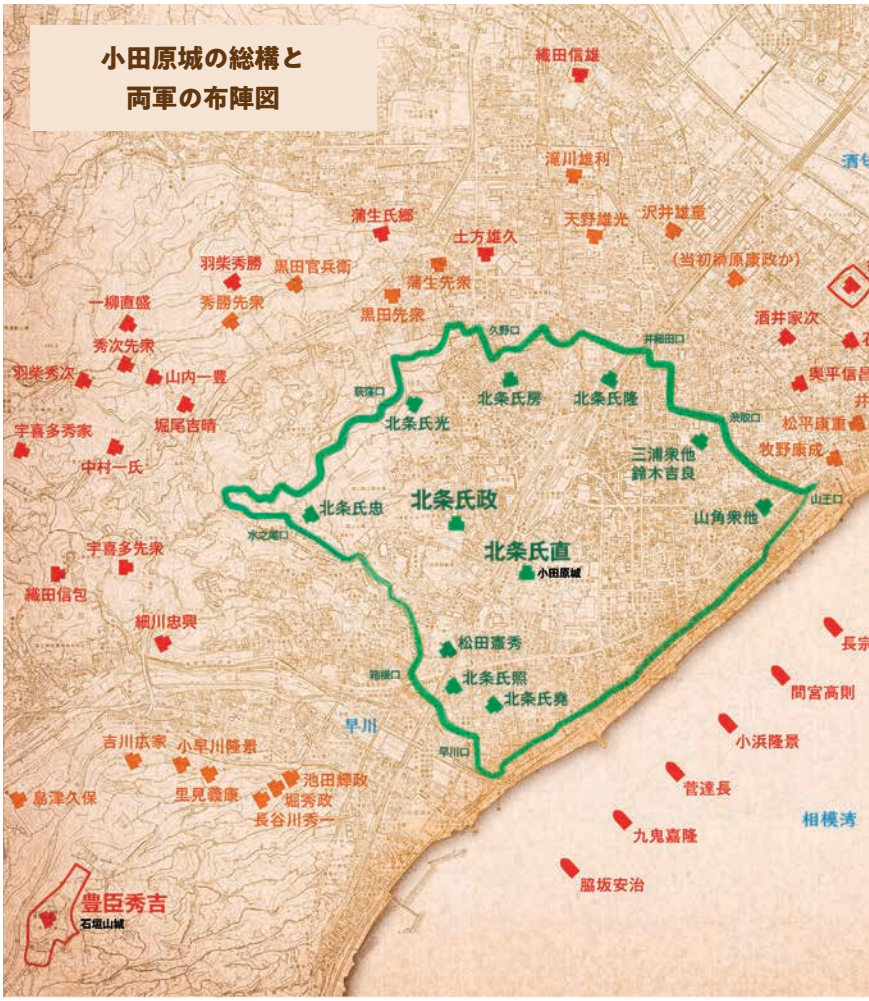
四代氏政の頃には「小田原城は難攻不落の堅城である」と内外の武士の口の端に上るようになりました。「越後の龍」上杉謙信が10万の軍で一カ月に渡り包囲するも撤退、「甲斐の虎」武田信玄にいたっては4日目に撤兵しています。

その後、豊臣秀吉との緊張関係が高まり、北条氏は天正15（1587）年から堀と土塁で城下を囲む総構（大外郭）の構築を開始しました。周囲の総延長9キロメートルにおよぶ総構は城下の家屋敷はもとより領民の居住エリアや田畑まで囲んでおり、籠城戦中でも食料生産が可能でした。まさに都市そのものを巨大な城としたのです。こうして小田原城は戦国時代でもっとも広い城となりました。

豊臣秀吉は小田原合戦を天下統一の総仕上げと位置づけ、これまでに従えた各地の大名に出陣を命じ、小田原城の総構を20万とも言われる大軍勢で囲みました。

秀吉は小田原城を見下ろす山上への築城を指示します。これが「一夜城」とも呼ばれる石垣山城です（上図の左下端）。石垣山城は文字どおり、全て――小田原城から見えない部分まで全てに――石垣を組んだ城です。中世最大の土の城・

（図版提供：小田原市）



小田原城対、東国で最初の総石垣の城・石垣山城。小田原合戦は中世から近世への歴史的な転換点といえます。

もちろん北条方にも石垣技術はありましたが、小田原城では石垣より経済的で、滑りやすく攻めにくい土（関東ローム層）の堀を築いたのです。事実、豊臣軍は大軍勢を従えながらも百日間もの間、小田原城を攻め落とせなかったのです。

迷惑だろうが…

小田原北条軍は領民を合わせて約10万、敵軍約20万。さて、合計約30万人の胃袋を百日の間満たすためにいったいどれほどの食料が必要だったのでしょうか。この時代の食事量は成人男子一人が一日に米五合と言われます。五合の倍が一升、十升で一斗、四

総構の障子堀　障子堀とは、堀の内部に障壁を掘り残した構造の堀のことです。約2メートルもの高さの障壁で斜面でも水堀（泥堀）になり、堀に落ちたらほぼ逃げられず敵の動きを封じる効果がありました。（図版提供：小田原市）

斗で一俵ですから、毎日3750俵もの米俵が必要だったと考えられます。小田原合戦はある意味、世界最大規模の兵糧戦だったと言えるかもしれません。

それだけの守りの要が総構だったのです。総構の構造を見てみると、周囲約9キロメートル、堀の上幅は最大で約30メートル、深さ10メートル以上もある大規模なものです。また堀には北条氏が多用した障子堀が採用されました。堀の底には約2メートルの障壁があり、敵の動きを封じる効果が期待できたのです。この堀はいわば領民総出で作り上げたようです。

小田原城の工事に関する文書が残っています。これによると、いついつに普請の工事をするので住民はもっこや鍬を持って集まってほしいと書かれています。注目したいのは

小峯御鐘ノ台大堀切　この付近は堀底が散策路として解放されており、堀や土塁の規模が体感できます。堀内部の傾斜は50～60度もあり、落ちたら容易に上がることができないことが実感できます。この惣構を目の当たりにした豊臣軍が、駿府城や岡山城をはじめ多くの城郭に採用したほどでした。
（撮影：小林輝久）

「迷惑だろうが」の一文です。「迷惑だろうが、ひとえに国のため、私（領民）のためであるがゆえに」と大名が領民に命ずるどころか、助力を頼んでいるのです。

結局、さすがの小田原城も秀吉率いる日本中の大軍勢の前に開城に至るわけですが、百年の間、家督争いもなく、一揆もなく、産業と独自の文化が花開いた小田原北条時代は、戦国時代における治世の大きな成功例と言って良いのではないでしょうか。

「平成の大改修」を終えた小田原城天守閣では、小田原城や各時代の城主の歴史について知ることができます。また、園内には甲冑などを展示する常盤木門ＳＡＭＵＲＡＩ館、風魔忍者をモチーフにした体験型展示施設ＮＩＮＪＡ館なども楽しめます。ぜひお出かけください。

北条年表

戦国時代

伊勢宗瑞（そうずい）

北条氏綱（うじつな）

北条氏康（うじやす）

大森氏

応永24年（1417）	大森氏が小田原周辺を領地とする
康正2年（1456）	伊勢宗瑞（北条早雲）生まれる（永享4年（1432）説あり）
康正2年頃（1456）頃	大森氏が小田原城に居城する
応仁元年（1467）	応仁文明の乱が始まる
長享元年（1487）	氏綱生まれる 宗瑞、甥の今川氏親を駿河国主に据え、以降東国に拠点を移す
明応2年（1493）	宗瑞、堀越公方足利茶々丸を逐い、伊豆国に侵攻する
明応4年（1495）頃	宗瑞、伊豆国韮山城へ本拠地を移す
明応5年（1496）～ 永正元年頃（1504）頃	宗瑞が小田原城を支配下に置く
永正元年（1504）	宗瑞、今川氏親・扇谷上杉朝良連合軍とともに武蔵国立河原に山内上杉顕定を破る
永正3年（1506）	宗瑞、相模国西郡での検地を行う
永正12年（1515）	氏康生まれる
永正13年（1516）	宗瑞、三浦氏を滅ぼし、相模一国を掌握する
永正15年（1518）	虎朱印状の初見文書下される
永正16年（1519）	この頃、氏綱が宗瑞より家督を継ぐ 宗瑞没する
大永3年（1523）	氏綱、伊勢から北条に改姓する
天文元年（1532）	氏綱、鶴岡八幡宮造営事業を開始する

北条氏政 うじまさ

北条氏直

天文6年（1537）	氏綱、今川氏と敵対し、駿河国河東地域に侵攻する。扇谷上杉氏の武蔵国河越城を攻略し、同国松山城を攻める
	氏綱、下総国葛西城を攻略し、武蔵国岩付城を攻める
天文7年（1538）	氏綱、足利義明・里見義堯連合軍を破る（第1次国府台合戦）
	氏政生まれる（天文10年（1541）説あり）
天文10年（1541）	氏綱没し、氏康が家督を継ぐ
天文13年（1544）	鶴岡八幡宮の造営が完了する
	今川義元・武田晴信（信玄）が連携して駿河国河東地域に侵攻
天文14年（1545）	山内上杉憲政・扇谷上杉朝定・古河公方足利晴氏が結んで武蔵国河越城を包囲する
	氏康は窮地に陥り、河東地域を放棄して今川・武田氏と和睦する
天文15年（1546）	氏康、山内・扇谷上杉氏と古河公方足利氏を河越で撃破（河越合戦）
	扇谷上杉氏滅亡する
天文19年（1550）	氏康、税制改革を実施する
天文20年（1551）	この頃、氏康、目安箱を置き、直訴を奨励する
天文21年（1552）	氏康、関東管領山内上杉氏を越後へ逐う
天文23年（1554）	甲斐武田氏、駿河今川氏との相甲駿三国同盟を結ぶ
永禄2年（1559）	『北条家所領役帳』が作成される
	氏政が家督を継ぐ
永禄3年（1560）	氏政、領国内に徳政を行う
永禄4年（1561）	氏政、小田原城に侵攻した長尾景虎（上杉謙信）を退ける
永禄5年（1562）	氏直生まれる
永禄7年（1564）	氏康・氏政、里見義堯を破る（第2次国府台合戦）

北条氏康

北条氏政 うじまさ

北条氏直 うじなお

永禄11年（1568）
武田信玄が今川領へ侵攻し、相甲駿三国同盟が崩れる。氏康は武田氏と断交し、植杉氏との相越同盟締結を主導する

永禄12年（1569）
氏直、今川氏真の養子となり、駿河国を譲り受ける。氏康・氏政、上杉謙信と同盟を結ぶ（相越同盟）
氏政、武田信玄の小田原城への侵攻を退ける。追撃を試みるも、退却を許す（三増合戦）

元亀2年（1571）
氏康没する
氏政、相越同盟を破棄して相甲同盟を復活させる

天正元年（1573）
室町幕府が滅亡する

天正2年（1574）
氏政、下総国関宿城を攻略する

天正6年（1578）
氏政、伊達輝宗と親交を約する

天正7年（1579）
氏政、上杉氏の家督争いの影響により、武田氏と断交する
氏政、武田氏の侵攻を受け、織田信長・徳川家康に接近する

天正8年（1580）
氏政、織田信長への従属を決める
氏直、家督を継ぐ

天正10年（1582）
この年、武田氏を滅ぼした織田信長が本能寺で横死する
氏直、織田信長の家臣・滝川一益を神流川で破り（神流川合戦）、信濃国へ侵攻する
氏直、甲斐国で徳川家康と対峙し、その後和睦する（天正壬午の乱）

天正11年（1583）
氏直、徳川家康の娘（督姫）を妻に迎え、同盟が成立する

天正15年（1587）
小田原城の大普請が始まり、総構（大構）が構築される（相府大普請）

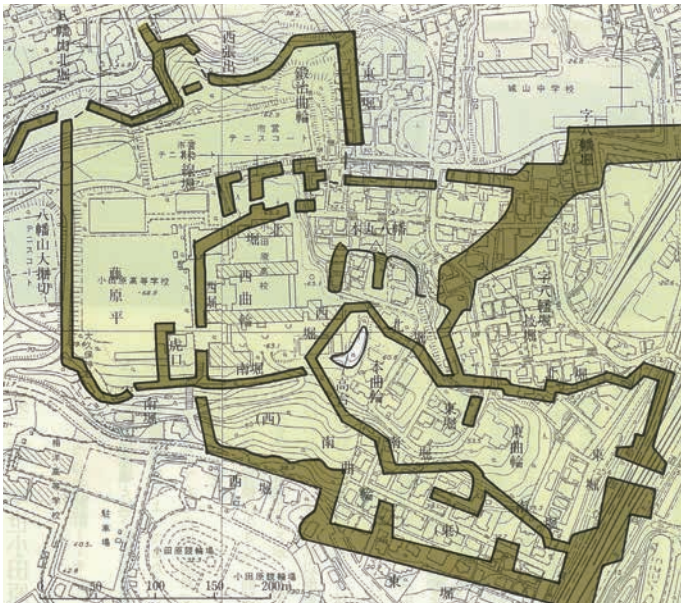
天正17年（1589）
豊臣秀吉、氏直に宣戦布告する
小田原合戦
北条氏が豊臣秀吉に小田原城を明け渡す
氏政と弟の氏照、自刃。氏直、高野山へ追放となる
大久保忠世が小田原城主となる（約4万石、後5000石増加）

天正18年（1590）

天正19年（1591）
氏直、赦免される。一万石を与えられ、秀吉に出仕するも病没する

小田原城周辺の遺構

小田原城



八幡山古郭遺構名略図　小田原市史別編城郭　小田原市立図書館　作図:小田原城郭研究会

中世の小田原城「八幡山古郭」

これまで小田原城の起源として、大森氏が築いた小田原城が現小田原高校周辺地域にあったと言われてきました。この地域はかつて北条氏が守護神として祀った本丸八幡と北条氏の後に城主になった大久保氏が祀った若宮八幡の二つの八幡社があったことから八幡山古郭と呼ばれています。

その核心部として小田原高校内の旧弓道場が本曲輪にあたると言われ、最近の研究では、近世本丸・二の丸が北条氏初期から城の中心となり、三代氏康の頃の記録に城址公園周辺が太守の館であると記されています。最終的には総構へと拡張したと考えられています。

遺構としては、発掘調査により天正年間に北条氏政の居城として再整備された戦国期の小田原城では最大級の巨大な堀が確認されています。また、旧弓道場の東にある高台は前方後円墳の可能性が指摘されています。

八幡山古郭の散策路

戦国時代の小田原城と前方後円墳といった重要な遺構が八幡山に存在しているため、現在、小田原高校の外延部に沿って遊歩道と旧弓道場には小公園が造られ、見学が出来るようになっています。

この散策路の北口（高校正門の手前）には、三本の短い鍵折れ状の堀を組み合わせて防御を厳重にし

戦国時代の小田原城

イラスト　香川元太郎

ていたとされる「三味線堀」の跡を見ることができ、散策路の途中のポケットパークからは、前方後円墳の一部を観察できます。

中世小田原城は赤土の城

中世の小田原城は滑りやすい粘土質の赤土、関東ローム層を掘り、削って造る土の城でした。ローム層に60度前後の傾斜角をつけるだけで城壁が造れます。

一方、石垣は城の防御というよりは、見て楽しむ装飾として使われたようです。小田原城御用米曲輪では護岸を施した池や敷石などが多数見つかりました。

近世の小田原城

天正18（1590）年、北条氏が去った小田原城には徳川家康の重臣大久保忠世が入城しますが、忠世は翌年天正19（1591）年に亡くなってしまい、その息子忠隣が小田原城主になります。その忠隣も慶長19（1614）年に改易となり、徳川家康と秀忠によって小田原城は破却されてしまいます。

大久保氏の改易以降小田原城は番城となり、城主がおかれませんでした。元和5（1619）年には阿部正次が城主になりますが、再び番城となり、寛永元（1623）年には徳川秀忠の隠居城として使われる案が持ち上がります。

しかし、寛永9（1632）年に秀忠が亡くなってしまい、その役割を得ることはありませんでした。その直後に稲葉氏が入城すると寛永11（1634）年には3代将軍徳川家光の上洛に伴い大改修が行なわれ、その

馬出門（うまだしもん）

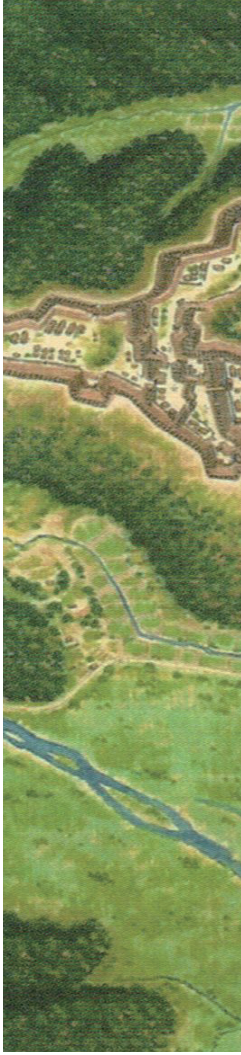
馬出門は大手筋の中で三の丸から二の丸へと通ずる最初の門になり、馬屋曲輪の北端に位置しています。内枡形式の門として正面の馬出門と内冠木門の二つの高麗門と土塀で構成されており、櫓門を用いていません。また、馬出門土橋から馬出門までもう一つ枡形状の空間が造られており、その導線が食違の構造を持たないことから天下太平の世の門構えを表しています。

銅門（あかがねもん）

銅門は常盤木門と同様に内枡形式の門であり、櫓門と内仕切門、土塀というパーツを組み合わせて構成されています。大扉などに使われた飾り金具に銅板などが用いられたのが名前の由来となります。この銅板を張り付ける事により、当時の大砲が直撃しても耐えられる強度を持つといわれます。

常盤木門（ときわぎもん）

常盤木門は櫓門と多門櫓という長屋風の櫓、二の丸からの入口には矢来門を組み合わせて内枡形の形式をとる門です。桝形に侵入した敵兵に対し正面及び左右三方から弓鉄砲の攻撃を浴びせる事ができる仕掛けとなっており、本丸の防衛として小田原城では最も堅固な造りを見せています。



後、近世城郭へと改変されました。

現代の小田原城

昭和25（1950）年、市制記念10周年に開催された子供博覧会の開催に伴い、本丸には動物園、その裏の屏風岩周辺には遊園地が造られました。また、天守閣再建の声も高まり、市内町内会の人々は「天守閣石一積連動」を展開し、昭和25（1950）年7月から着工、6期の積み直しを経て昭和28（1953）年に天守台の石垣積み直しが完了しました。

平成28（2016）年には耐震改修工事に伴い天守閣がリニューアルオープンしました。最上階に復元された守護神摩利支天を祀る須弥壇は、神奈川大学名誉教授西和夫の「小田原城天守閣模型等の調査研究」の成果を基に復元されました。

小田原城周辺の遺構

総構

周囲9キロの防衛ライン

小田原城総構とは、小田原北条氏が天正18（1590）年、豊臣秀吉の来攻に備え、城下町の範囲まで堀と土塁で囲んだ周囲9キロメートルにも及ぶ防衛ラインです。小田原城攻囲戦に総勢約16万とも言われる大軍を投入した秀吉もこの巨城の前では力攻めを諦め持久戦へとシフトしたと考えられています。

実戦の総構

城壁で都市を取り囲む例として、中国の万里の長城や都城、西洋諸国の城塞都市が見られますが、国内で総構の最占のものとして荒木村重の居城として有名な有岡城で確認されています。

織田信長の岐阜城や安土城などにも総構がありましたが、小田原城総構の優位性は実戦で約15万の大軍を相手に互角に戦った実績があることです。

小峯御鐘ノ台大堀切

小田原城は箱根外輪山から延びる丘陵地の先端に位置していますが、その途中の小峯御鐘ノ台にて丘陵地が北側の谷津丘陵、中央の八幡山丘陵、南側の天神山丘陵の三本に枝分かれしており、丁度御鐘ノ台の位置

小峯御鐘ノ台大堀切・東堀・中堀・西堀全体図
小田原市史別編城郭　小田原市立図書館
作図：小田原城郭研究会

総構の遺構は丘陵地側に多く、なかでも見どころは図の左上「小峯御鐘ノ台大堀切」周辺です。車で入れない場所もあるので、散策には徒歩か電動アシスト付自転車がおすすめです。小田原駅西口（新幹線側）から丘陵地に向かう「白秋童謡の散歩道」（図中の点線）を参考にすると総構の遺構の多くをたどることができます。（図版は小田原市制作の図をもとに描き起こしました。撮影：小林輝久）

相模湾や丹沢の山なみを望む絶景ポイントです。北原白秋はここからの眺めを野外劇場の観客席と表現しました。

道から少し北へ入ると、総構の空堀が竹林の中に幻想的に残されています。

小田原城天守と戦国時代の八幡山古郭が望めます。

敵方の動向を観察するために方形に張り出した土地で、今もその形状を残しています。

道沿いに土塁が残りその西側には空堀が観察できます。

幅約20mの空堀を体感。小田原北条氏の築城術が駆使された必見の場所です。

戦国時代の小田原城中心部で、城下を一望できる史跡公園です。

二重戸張（ふたえとばり）と呼ばれる土塁と堀を二重に配した特殊な構造をうかがうことができます。

総構の最
には、こ
設けられ

からたちの花の小径
香林寺山西
稲荷森
白秋童謡の散歩道
小峯御鐘ノ台大堀切
小田原城天守と八幡山古郭を望む
城下張出
小田原用水
三の丸外郭新堀土塁
北条早雲公
西口
小田原駅
東口
八幡山古郭・東曲輪
箱根板橋駅
箱根登山鉄道
早川
小田原城天守閣
小田原城址公園
早川口遺構
早川駅
小田原文学館白秋童謡館
小田原宿なりわい交流館
早川IC
西湘バイパス

が丘陵地の御扇の要に位置しています。そしてこの地には3本の大きな掘切が構築されており、以降の3本の丘陵地へ箱根方面からの敵兵の侵入を完全にシャットアウトしようとする思惑が伺われます。

三の丸外郭新堀土塁

小峯御鐘ノ台の先の三の丸外郭を構成する新堀へと続く堀で、便宜上新堀と区別して呼称しています。途中横矢掛が一カ所見られますが、三本の掘切の中では比較的直線的で緩やかな孤を描く堀で、永禄12（1569）年の武田信玄の来攻以降に構築されたと考えられています。堀幅20～30メートル、堀底から土塁上部（天端）までは約12メートルあり、堀の法面は60度前後という急勾配を見せ、堀としては全国的に最大規模と言われています。

小田原城周辺の遺構

石垣山城

イラスト　香川元太郎　考証　西股総生

石垣山城

石垣山城は天正18（1590）年、天下統一を目指す農臣秀吉が小田原合戦の際に築いた関東では初の本格的な総石垣造りの城です。

秀吉は同年3月1日に京都を出陣後、4月6日には箱根湯本の早雲寺に着陣。その日のうちに小田原城を見下ろす標高262㍍の笠懸山に登り築城を決断。4月28日には早くも5月中に石垣と御殿が完成する見通しになっており、5月14日には御座所の石垣が完成、御殿や天守の着工にかかっていました。

完成は6月26日、秀吉は陣所とした早雲寺を焼き払い、石垣山城に移っています。工期には約80日間が費やされ、昼夜問わずの工事にて築かれました。

石垣山から小田原の街を見下ろす

完成の夜に周囲の木を切り払い、あたかも一夜にて築城したかのように見せつけて北条氏を降伏に追込んだという伝承から「石垣山一夜城」と呼ばれています。

臨時の陣城と思われがちですが、天正19年と箆書きされた瓦が天守台近くから見つかり、その後の利用の可能性も指摘されています。

野面積の石垣

野面積みとは自然石や割った石を用いる積み方です。排水に優れていますが、積み上げるのには高度な技術を要する積み方です。

手掛けたのは近江の石工集団、穴太衆（あのうしゅう）です。穴太衆35人が小田原開城後の7月11日まで滞在していたことも解っています。

石垣はその後改修を受けなかったため、４００年前の姿そのままで残り、全国でも珍しい天正期の野面積みが生で観察できます。

石垣山城からの眺望

石垣山城と小田原城本丸との直線距離は約3キロメートル、石垣山城の最高所の標高は天守台で２６２メートル、対し小田原城は一枚畠の１２３・８メートルです。約2倍の高低差があります。

石垣山城は笠懸山に築かれた北条氏の出城を改修したともいわれ、北条記や太閤記などでは豊臣方に内通した北条氏の重臣松田憲秀が小田原城を見下ろす笠懸山の築城を秀吉に勧めたと記されています。小田原城内が丸見えとなったため、北条氏には不利な展開となりました。

小田原城
天守閣

小田原城天守閣は、3重4階の天守櫓に付櫓、渡櫓を付した複合式天守閣で、地上38.7㍍、鉄筋コンクリート造、延床面積1,822平方㍍となっています。内部には、甲冑・刀剣・絵図・古文書など、小田原の歴史を伝える資料や、武家文化にかかわる資料などが展示されています。標高約60㍍の最上階からは相模湾が一望でき、良く晴れた日には房総半島まで見ることができます。

〔表紙の和歌〕永正9（1512）年、戦勝祈願に鎌倉の鶴岡八幡宮を参拝した伊勢宗瑞（北条早雲）が奉納した和歌です。荒廃した鎌倉の町を復興させたいという歌ですが、同時に国づくりへの情熱を感じさせる一首です。

小田原北条氏　百年の夢
令和5年12月発行
発　行:一般社団法人小田原市観光協会
〒250-0042
小田原市荻窪350番地の1小田原合同庁舎内2階
TEL:0465-20-4192　FAX:0465-20-4194
URL:https://www.odawara-kankou.com/
編　集:小田原城天守閣（小田原城総合管理事務所）
後　援:小田原市
協　力:公益財団法人はまぎん産業文化振興財団